

## 研究結果報告書

### 川端康成〈犯罪〉作品研究

所属： 高雄餐旅大學 応用日語系  
役職： 助理教授  
氏名： 黄 如萍

「二十歳」は昭和8年2月『改造』に発表された小説である。

この作品は、川端康成が昭和8年前後に発表した〈犯罪〉作品群の一つに数えられるものである。

これらの〈犯罪〉作品群に関して、川端自身は後年、創作当時の状況、心境、または個々の作品の創作の動機、背景を語っている。例えば「二十歳」と「田舎芝居」は警察の犯罪捜査の実例記に基づいて書いた」（岩波文庫版『抒情歌・禽獣』あとがき 昭和二十七年六月）という表記が見られる。つまり、典拠として事件の記録が存在することを示唆している。

更には、先行研究においては、上述のような自作解説が大きく関連しているものと考えられる。

例えば、小林芳仁（「川端康成の実録的犯罪小説」（『解釈と鑑賞』平成5年5月）、「川端康成の実録的犯罪小説二―「散りぬるを」その事実と虚構の美学―」（『解釈と鑑賞』平成5年12月）、「川端康成の実録的犯罪小説」（『十文字国文』平成7年3月）では、川端の後年の自作解説を参照しながら、川端は警察の捜査資料にもとづいて事実を潤色し、昭和5年から13年の間に一連の実録的犯罪小説を書いていることを指摘した。

言うまでもなく、作品がある作者の創作である以上、作品と作者を完全に切り離すことは不可能である。川端康成の場合は、作家自身による「あとがき」に作品の読解の鍵が隠されていることは否めない。しかし、これまでの先行論は、作品を扱う際に、作品と実際の捜査記録などを一つ一つ照合しようとするあまり、一つ一つの完結した作品世界の精読を行ってこなかった傾向にあると言えるのである。

したがって本研究では、作者の「あとがき」といった作品外の要素を一旦排除し、作品の世界そのものに重点をおくことにした。〈犯罪〉を通して、作品そのもので何が表現されているのか、その〈犯罪〉作品の本質を考察したのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「川端康成「二十歳」試論」 黄如萍  
第二回アジア未来会議 (2nd Asia Future Conference 2014)  
2014年8月23日  
インドネシア

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「川端康成「二十歳」試論」 黄如萍 (雑誌論文・投稿予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)